

期限切れ食品で節約

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第2部 親は... (3)

⑤

ナミ(上)

食卓に上るのは、ふりかけをかけただけの飯が基本。おかずはない。カレーやシチューは異なし。

離島の過密地域で暮らすナミ(9)と高校2年生、小学2年の妹たちの食生活だ。母子3人は現在、子どものいる世帯に支給される、月給1万円、8万9千円の田の手当だけで生計を立てている。

ナミは別荘のころ、重い腰の病気で手術を受け、後遺症が効いて、長時間歩いたり、座ったりするのが困難になった。次女には発達障がいがあり、1人にするのが難しく、かみからず、目が離せない。そのこともあって、

ナミは働いてはダメだ。中学生までの子どもを養育する間に支給される「児童手当」、所得の低いひとり親世帯に支給される「児童扶養手当」、障がいのある子を養育する親に支給される「特別児童扶養手当」が生計を支えている。

特別児童扶養手当は申請しなければ支給されない。ナミがこの手当を知ったのは去年、昨年3月まではそれを降ろすことが出来ずから6千円だった。

役所に勤める知人からは、生活保護の申請も勧められた。しかし、支給するためには、自家用車を処分しなければならぬ。次女は発達障がいのほか、ぜんそくの持病もあり、発作が起きたら、頻りに通院が必要になる。ナミ自身の通院費や、長女

カレーやシチューは具なし



ナミ(左)と2人の姉たち。ギリギリの生活だが、ナミの朝暮のおおげな生活は無い

の生活費の送迎などもあり、車は生活に欠かせない。車内はパスタの本数も少ない。車を手放すことはできません。保護の受給を断ると、

家族3人が9万円田舎で暮らすというのは簡単ではなく、節約生活を徹底している。

近所や友人から、賞味期限切れの缶詰やレトルト食品があるのを聞くと、喜んで譲り受ける。「食べられるか?」かは自分の鼻と舌で判断する」とナミ。

米は4カ月1度、送料の要らない会社を通じて、30分をインターネットで購入する。また、カレーに缶詰のコーンや野菜などの具が入ると、子どもたちから「お母さん、きょうは向かったの?」と言われる。光熱費を毎月支払う余裕はななく、ライフラインが止められないギリギリのタイミングを計算らって、まとめて支払う。

子どもたちは毎日風呂に入れるが、水遣代を節約するため、ナミが頭を洗うのは3日に1度だ。

子どもたちの服はほとんどよそからのおごり。長女は、ナミが10代のときに着ていたトレーナーを愛用している。おしゅれたいい感じだろが、「着れればいい」と、愚痴一つ言わない。

「ずっと養育の流れてきた。ナミ自身、貧困家庭で育った。家計を支えるため、社会に出て働き始めたのは、中学卒業後、まだ15歳のときだった。」

①文中敬称省略
②子どもの貧困取材班・高橋園子 ③火・木曜日掲載